



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

June 2016

vol. 21

教学 IR ができること

教育推進部 教授 森 朋子

教学IRという言葉を目にしたことがあるでしょうか。教学IRのIRは、インスティテューショナル・リサーチの略語であり、そもそも企業が自社の経営改善に使っていた手法です。大学におけるIRでは、主に教育、経営、財務情報をも含む大学内部のさまざまなデータを分析し、その結果を大学経営や教育改善に反映することを目的とします。これまでなんとなく感覚で得ていた「教える」と「学ぶ」の成果を、様々なデータを用いることによって立体的に「見える化」しようという試みです。本学でも、2年前に教学IRの組織が誕生し、学生の学びの質の保証をさらに向上させるための基盤の活動となるべく、現在、活動中です。

日本に限らず、世界各国の大学にも教学IRが多く導入されていますが、そこでの目的は、「教える」の改善をどのように進めるか、に重きが置かれています。例を挙げるとすれば、ある教育プログラムにおいて、学生の満足度が低

いということがアンケート調査で明らかになれば、その要因を他のデータも含めて検討し、具体的な改善案を提示し、実行する。そして数年後、同様のアンケート調査において、満足度の数値が上がれば、改善が図られたと考えられる、といったストーリーです。現実では、非常に複雑な要因がいろいろと絡み合うので、このように単純化できる事例はあまりありませんが、データをベースに教育の改善を図っていく、というのが大きな改革の流れです。

このように「教える」を改善することにおいては大きな力を発揮する教学IRですが、課題も見え隠れします。特に、肝心の学生の学びの向上には、これまで直接的に威力を発揮できずにいました。そこで本学の教学IRは、本来の「教える」に加えて、新たに学生の「学ぶ」そのものをサポートすることをその目的に掲げています。具体的な案として、2つほど考えています。まずは、いろい

ろな調査結果を広報物にしてキャンパス内で共有すること、これはすでに2015年度入学時調査において実現することができました。次に本学における学生の学びの軌跡や成長を「見える化」し、それを個別にフィードバックすることです。個々の学生が持っている強みや課題を視覚化することで、教職員による、より質の高い学修支援が可能になります。さらに学生自身のメタ認知も刺激することによって、本学にある様々な教育・学習プログラムの、より積極的かつ主体的な活用を促すことができるとも考えており、今現在、その可能性を探っています。

「教える」も「学ぶ」も、すべてが数値で表されるわけでは到底ありません。それでもその現状をデータという形で示し、それらを大学の構成員である学生、職員そして教員のコミュニケーションツールとして活用することで、対話が生まれると考えています。

フォーラム・セミナー報告

第12回日常的FD懇話会「教学IRが果たす役割と今後の展開」を開催しました

話題提供：高橋哲也先生（大阪府立大学教授、学長補佐）
 畑野 快先生（大阪府立大学特任助教）
 紺田広明先生（関西大学アドバイザースタッフ）

日時：3月16日（水）14：30～16：30
 場所：第2学舎2号館C303教室

今回は教学IR先進大学でもある大阪府立大学から高橋先生、畑野先生をお招きしました。高橋先生からはこれまでの副学長としてのご経験、さらには現在の学長補佐としてのお立場から全学レベル（マクロ）について、畑野先生には実際に教育改善の基盤となる、学士課程や教育プログラムレベル（ミドル）について、事例をお聞かせいただきました。今回は学内のイベントとして限定することで、普段なかなか公開できないデータ分析の結果もご提示い

ただき、改めて教学IRが果たせる役割の大きさを認識することができました。当日は本学からも、現在、推進中である教学IRの全体像について、教学IRプロジェクトの紺田先生にも報告いただきました。当日は平日の午後早い時間開催にも関わらず、教学IRプロジェクト関係者中心に20名が参加し、そのマネジメントや効果について、双方の大学において有意義な議論を展開することが出来ました。

（教育推進部 森 朋子）



日常的FD懇話会の様子

今期もFD Caféを開店しました

4月23日（土）、恒例の“FD Café”（新任教員研修会）を開催しました。新年度開始早々の気忙しい時期でありましたが、12名の参加を得ました。新任校での授業

を数回経てからの方がリアリティに満ちた対話ができるとの考えから、2011年度より4月の下旬を開店の時期にしています。

また一昨年度より、CTLが推進する各種プロジェクトの内容をご理解いただき、それを日常の教育実践に反映していただけるようにメニューに変更を加え、充実を図っています。

このたびのCafé Timeはカードに書かれた4桁の数字の共通点を発見してグループメンバーを探すアイスブレイクから始まり、その後、クリッカー（オーディエンスレスポンスシステム）の活用方法、TA・LAなどの学生の教育力を活用する制度の説明、関西大学LMSの使い方に関す

日時：4月23日（土）13：00～16：30
 場所：第2学舎2号館C203教室

るインストラクション、ライティング・ラボやコラボレーション・コモンズなど、CTLの新しい取組の紹介、あるいはグループワークの意義と価値を学生が実感できる手法の体験など、さまざまなインフォメーションやコンテンツ、メソッドを提供できたと思います。

コンテンツやメソッドに関する情報等を提供することも大切ですが、学部や専門分野を越えた教員のつながりを大切に育んでいくこと、これあってこそ豊かなFDを展開できると考えています。今後も、新しいメニューを開発していくつもりです。4月以外の開店も考えております。その折には、どうぞお気軽にお訪ねください。

（教育推進部 三浦真琴）



FD Cafeの様子

ライティングラボの活動のご案内

～ラボは今年も熱いです～

ライティングラボ (wlabo@ml.kandai.jp) では、学部生のライティングレポート・論文をはじめ、さまざまな文章作成のお手伝いを

(1) ライティングラボでの支援

ライティングラボは、千里山キャンパスでは第1学舎1号館5階と総合図書館ラーニング・コモンズ内ライティング・エリア、高槻キャンパスではC棟1階学生サービスステーション内にあります。大学院博士後期課程の学生(TA)が学部生に文章作成についてのアドバイスをしています。レポートや卒業論文はもちろん、発表資料(レジュメやスライド)や留学・ゼミの志望理由書などの学生生活にかかわる文章まで、さまざまな種類の文章に対応しています。

文章作成にまつわる学生の悩みは多様です。その一つひとつを解決していくことで、学生が自信を持って文章を書けるよう、支援しております。

ゼミや授業との連携も積極的に進めており、現在は先生方からのお問い合わせも増えております。例えば、授業でのラボ利用ガイダンスの実施や、先生から学生へのラボ利用の指示などの形で連携しています。

ご関心のある先生は、メールでご連絡くださるか、第1学舎1号館6階のラ

イティングラボ2まで、ぜひ気軽にお立ち寄りください。お待ちしております。



(2) レポートの書き

お昼休みの30分間でレポートの書き方のワンポイントを解説する講座を開催しています。2016年度は、4月に千里山キャンパスと高槻キャンパスで開催し、追加開講するほどの大盛況ぶりでした。今後も、レポート作成に役立つテーマ（レポートの構成、文献の引用などの基本的なテーマ、文献の批判的読み、要約、

CTL プロジェクトの紹介

①学生の教育力活用プロジェクト

学生の教育力活用プロジェクトでは、学生の教育力を活用した授業のための制度整備、学生スタッフへの研修をすることで、質の高い学習・教育の振興に寄与することを目指しています。本学には、教員の教授を支える「TA（ティーチングアシスタント）制度」、初年次科目におけるグループワークのファシリテートをするなど学生の学

びを支える「LA（ラーニングアシスタント）制度」があります。これらの制度を軸に、学生の教育力を活用した学習・教育の質向上を推進していきます。また、学習支援に関する諸組織とも連携をとりながら活動をすすめていきます。

(教育推進部 岩崎千晶)

②ICT活用授業の普及活動

これからの社会を生き抜く大人には、ライフロング・アクティブ・ラーナーとしての素養と信頼を得るためのアドバンスト・コミュニケーションのための高度なICTリテラシーが必須となります。このプロジェクトでは、ライフロング・アクティブ・ラーニング環境で活用できるシンキングツールやICTを活用した学習環境の普及・啓蒙を目指していきます。

例えば、6月の第12回日常的FD懇話会では、母国語及び外国語でのライティング支援、理数系のレポート課題の提出・添削によるアドバイス・再提出までをICTで一元管理し、ピアレビューによるアクティブ・ラーニング環境、効率よく質の高い学びを保証するICTを情報共有させていただきます。

(教育推進部 山本敏幸)

③ライティング支援プロジェクト

ライティング支援プロジェクトでは、平成24年度に文部科学省大学間連携共同教育推進事業に採択された取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援」を推進しております。学内3ヶ所に設置された「ライティングラボ」におけるライティング支援を中心に、

「文章表現ワンポイント講座」の開催や、「書く力」をめぐる評価指標の開発と運用、ライティング支援に特化したeポートフォリオの開発と運用など、学生の学びを支援する様々な活動に取り組んでいます。

(文学部 中澤 務)

④アクティブ・ラーニング

教育開発支援センターでは本学にアクティブ・ラーニングが浸透することを願って、学生の学習が主体的、活動的なものになるような知見や情報の提供・共有あるいは創出に尽力しています。特に、平成26年度に文部科学省大学教育再生加速プログラムに採択された『21世紀を生き抜く考動人 Lifelong Active Learnerの育成』において、

これまで取り組んできたLA（Learning Assistant）の活用と育成を精力的に継続するとともに、交渉学を大きな柱とした取組により、創造的な思考と責任ある行動を実践していく社会人の基礎力の涵養を目指しています。

(教育推進部 三浦真琴)

⑤学習環境デザインプロジェクト

2013年度に発足した学習環境デザインプロジェクトでは、質の高い学習・教育の促進を目指した学習環境をデザインすることを目的としております。具体的にはコラボレーションcommons、図書館ラーニングcommons、サテライトステーション2など、授業外の学習環境における

学びの場のデザイン、機材や什器等の整備を行います。ならびにcommonsで提供する学習支援の企画、実施、評価をすることで、よりよい学習環境の構築を目指しています。

(教育推進部 岩崎千晶)

⑥成果指標検討

現在、本プロジェクトでは、教学IRの推進と初年次教育に関するcommon-rubricの作成の2本の柱を中心に活動を行っています。いずれも学習を評価することで教育改善を目指すものですが、それにとどまらず、その評価を直接、学生が自らの学習状況として把握でき

るツールとしても活用することで、学生の学びに関する主体性を喚起できるのではないかと考えます。直接活用、間接活用も含め、より学生の学びのサポートのあり方を検討していきます。

(教育推進部 森 朋子)

ライティング(文章作成)力向上のため、
しています。

ライティングラボに関する詳しい情報はホームページ
(Facebook、Twitterを含む)まで。



ワンポイント講座

レジメの作成ポイントなどの応用的なテーマ)で講座を4つのキャンパスで開催します。日程やテーマの詳細情報は、インフォメーションシステム、学内掲示、ライティングラボホームページ(FacebookやTwitterを含む)でも随時お知らせしています。先生方も学生に参加をすすめていただけましたら幸いです。



(3)「考動力」作文コンテスト

伊丹市教育委員会協力のもと、作文コンテスト(小論文とショートショート)の2部門を開催しています。文章を書くことを通じて培った考える力・表現する力を発信する場として、昨年度はゼミ単位で応募して下さる先生もいらっしゃいました。ご関心のある先生方は、「ライティング力を試すきっかけ」として、ぜひ学生に応募をおすすめください。



Learning Assistant

LA活動報告

Fil2016で第一位に輝きました

2月26日(金)、東京都市大学の二子玉川夢キャンパスを会場に「Field of invaluable learning 2016」(略称Fil2016)が開催されました(株式会社Learning Value主催)。これは、学生が自ら考え、行動し、時には周囲の力を借りながら組織としても成長していく姿や経緯をプレゼンするための新しい企画です。今回は全国から120人を超える大学関係者・企業関係者が集まりました。本学

からは共通教養科目の『恋する学問』を提案したLA (Learning Assistant) 3名(政策創造学部3年松田昇子・文学部3年緒方友香・商学部3年篠原梨沙:学年は参加当時のもの)が参加しました。彼女たちは科目を提案するに止まらず、実際の授業では受講生がアクティブ・ラーナーになれるように支援するために、受講生の声を漏らさず聴こうと心掛け、本人が気づいていない知的

好奇心や探究心のあることを受講生にそっと伝えようとなりました。何より常に新しい「何か」を創造しようと精力的に活動しました。その活動がFil2016の参加者及び関係者に高く評価され、『応援したい団体』の第一位に輝きました。なお、「恋する学問」は今年度秋学期にも開講されます。

(教育推進部 三浦真琴)

海外でのインターンシップ経験

3月13日から18日までの期間、関西大学のLAが台湾台北市での国際学会International Symposium for Grid Computing 2016(以下、ISGC)で現地学会スタッフと共に、学会の設営、準備、受付、運営業務等で活躍し

ました。ISGCは毎年開催されている最先端ITテクノロジーの学会で、全世界から200名以上の参加者のある学会です。

参加したLAは、青木優介、池澤智也、塚本悠平、大早亜美、大久保有理、吉田麟の6名でした。

LAたちは3月10日より現地入りし、スタッフオリエンテーションを受け、学会スタッフとして活躍しました。

学会開催前には、現地スタッフと共に本部事務室、会議室の設営、学会バッジ、学会資料、ミールプランの確認、プレゼン用AV機器の設置等をおこないました。学会開催中には、受付業務、コーヒープレイクの準備、会場内の誘導、プレゼン用AV機器の調整、発表者補助、タイムキーパー、プレゼン資料のアーカイブ等を担当しました。学会終了後には、後片付けや撤収作業をおこないました。現地のスタッフとチームでイベントプロジェクトを最初から最後まで達成するという貴重な経験を得ることができました。

学会の閉会式では、学会責任者のDr. Simon Linより感謝状が渡されました。来年度もインターン受け入れの了解を得ることができました。

(教育推進部 山本敏幸)



ISGC ホームページより



発表者との打ち合わせ



学会主催者Dr. Simon Linと記念撮影



学会受付業務中のLAたち



学会受付業務中のLAたち



学会受付業務中のLAたち

From CTL事務所

「こんな環境で勉強できる学生が羨ましい」
連休に帰阪してきた大

学時代の友人たちを新緑輝く千里山キャンパスに案内した時、すっかり様変わりした正門を前にして彼らが漏らした言葉だ。私たちがこの場所で学んでいたのはおよそ30年前、本学が創立100周年を迎えようとする頃である。

時は流れて、今や本学は「校風や雰囲気が良い」イメージでは関西首位、そして「おしゃれな」大

学としても堂々ランクインしている(リクルート進学総研「高校生に聞いた大学ブランドランキング2015」より)。立派になった母校に、喜びを通り越して羨望の念を禁じ得ない彼らの気持ちはよく分かる。

本誌でも紹介されているように、教育開発支援センターでは学生やICTの積極的な活用、各種セミナー等の開催、他者と共同し主体的学ぶための学習環境整備など、多様な取り組みにより本学の教育向上を図っている。今春からセンターに携わることとなった私は、可能な限り催しに参加し、研

究紀要などにも触れることで、これらの取り組みのいずれもが教員・職員・学生が有機的に協働を行うことで実現していることを実感した。アルバイトやサークル活動に精を出し、どちらかと言えば学ぶことに対して受け身であった私たちとはずいぶん隔たりがある。

関西大学が創立130周年を迎える今秋、もう一度友人たちをキャンパスに招き、外観だけではなく、教育環境についても大きく進化していることを自慢したい気持ちでいっぱいになった。(丸)



KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514

http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日/2016年6月27日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター